蓼高同窓会報

発　行
蓼科高等学校
同窓会事務局
0267-56-1015

晩秋の日差しに輝くポプラ

先人達の思いを引き継いで

同窓会長　芝間　教男

本校「八十周年記念誌」によれば、明治三十二年に文部省の実業学校令が公布されると、実業補習学校設立の機運が北佐久郡会においても高まりました。

時の郡会議員、土屋省三（芦田村）、吉村源太郎（横鳥村）両氏は早速、実業補習学校を設立するため奔走します。明治三十三年三月には三都和・横鳥・芦田三村より各村三名ずつの全権委員が選定され、実働組織が設立されました。

やるべきことは、校地の選定・交渉からはじまり、学校組合の規定、設立の賦課金算出など山ほどありました。

それらを全てこなし、なんと九月十八日付けで実業高等学校設置の稟請が長野県知事あてに提出され、十月十六日付け長野県知事指令で認可されました。すなわちこの日をもって本校が設立されたのです。

そこで、不思議に思うことがあります。なぜ田舎の片隅に、この蓼科実業補習学校（現蓼科高等学校）が、県下九番目という異例の早さで設立されたのか。長野県では、松本を皮切りに上田・長野・飯田と都市部を中心に中等学校が設立されました。それらは高等小学校より更に学問を身につけるための中等教育機関でしたが、北佐久郡においては、地域産業の担い手となる人材の養成（実業教育）が強く求められていたと記念誌にあります。

当時、この地域は概して貧しかった。その中において、産業としての農業が成り立っていくよう後継者を育てる。先人達は、将来に大きな夢を描いて、必死に実業学校設置をこの地に引き寄せたのではないか、との思いにたどり着くのです。

地域の担い手を育てるという、この思いは現在まで綿々と引き継がれるとともに、立科町をはじめ関係市町村の多大なるご支援をいただく中、本校がこの地に存する意味は益々高まっていると考えております。

同窓生の皆様には、この先人達の思いを引き継ぐとともに、生徒が自らの夢と希望をかなえるため、母校に変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

地域と共に学び続ける

校長　吉澤　健二

昨年四月より第三十四代校長を拝命致しました吉澤健二と申します。

日頃より芝間同窓会長様をはじめ同窓会の皆様には本校の教育活動に御理解、御支援を賜り深く感謝申し上げます。

さて、私が赴任してからすでに九ケ月が経過しました。依然としてコロナ前のような教育活動を行うことは難しい状況でありますが、全職員・生徒で「コロナ禍でもできるかぎり行事は実施しよう」と前向きにアイデアを出し合い、縮小や形を変え全ての行事を実施することができました。夏休み明けのポプラ祭は土曜日のみの開催となりましたが、今年度は各家庭二名までの限定公開を行うことができ、二年生は十月に三泊四日で沖縄への修学旅行を実施しました。

また、一年生からは新教育課程が学年進行で始まっています。本校で培ってきた「地域とのつながり」を最大限に生かした新たな「蓼科学」（総合的な探究の時間）を全生徒が学び、地元企業の見学や地域の歴史に触れるなどの学習を行っております。同窓生の皆様はもとより地域と共に生徒を育てることが現在も続いており、お力をお貸しいただいている皆様に感謝申し上げます。地域に学ぶことで生徒は地域を身近に感じ、やがてはそれぞれの地域や社会に貢献できる人材となってほしいと切に願っているところであります。

今後とも社会を担い地域に貢献できる生徒を育ててまいりたいと考えておりますので、同窓生の皆様の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。